

ち殺したなどと報告されたのではたまらないと思ひ刃向かうのをやめた。すっかり落ち着いた時期であったが、シベリアには文化的なものは、薬器を除いて少なかった。

スターリン　ネーハラシヨ

伏採で雪山に入ったとき、同じくソ連の囚人がこの山に入り、一囚人と遭遇したところ、この囚人は首に十字架のペンダントを下げており、「スターリン　ネーハラシヨ」と言い、私を指さして「ダモイ」したらスターリンの首を切ってくれと、自分の首を手刀で切る真似をして「スラー」と言うのである。遠くに人影を認めるとさっと森の中に消え去ったが、ソ連の一面を見たという感じであった。

## 抑留記

千葉県　綾部　栄次

私は戦時中旧満州国奉天北陵に住んでおりました。昭和二十年現地召集をうけ、これで二回目の軍隊生活でした。一回目は北京、南京と転戦しましたが、こんどは満州に産み月の妻と一歳の子を残しての入隊は何か不安でたまらなかつた。

八月一日、後髪引かれる思いで新京第二六〇〇部隊に入隊、南嶺の法政大学が兵舎であつた、その頃には兵器は充分に無かつたようだった。

私の任務は奉天から一緒であつた大橋兵長と司令部間を自転車で伝令するのが任務でした。他の兵隊達はソ連軍の侵入に備えて鎗壺掘りが主な任務だった。

八月九日の夜、満人部落に爆撃があつた。それから急遽部隊の編成替えが行われ、私は南嶺湖の土手を切る斬込分隊に組み入れられたが、伝令の仕事は続けら

れていた。重大放送を司令部で聞いた。大急ぎ部隊に  
帰り連絡した。他の中隊では開拓団と満鉄出身者は召  
集解除になったようだったが、私達の隊長は、昨日ま  
での満州とちがう。この際、集団でいる事こそ安全だ  
と言っていた。或る大雨の晩大橋兵長と新京駅へ行っ  
たが、駅は開拓団の避難民で大混雑であった。もう列  
車は動かない、と云われ部隊に帰った。その後も伝令  
を続けていた。通路は安全のため指定されていた。

司令部の帰り、十字路の向こうにソ連兵が四、五人  
いて拳銃を上空に向けて発射して「ストイ、ストイ」  
止まれ止まれと叫んでいた。

大橋兵長は元警察官であったためか、素早くどこか  
に逃げたが、私は逃げ遅れた。その時、私の身を案じ  
てか邦人が「逃げたら駄目だ」と叫んでくれた。私は  
両手をあげ降伏の態度をとった。ソ連兵は私の許に來  
て帯剣をとり上げ足でその剣を踏んづけた。無性に腹  
が立ったが、武器を持っている相手にはかなわぬと我  
慢した。

その時時計もとられ自転車もとられた。私の腕章を

見た一人のソ連兵が「スヤス、スヤス」伝令だと言っ  
て態度を和らげたようだった。

そして最後に自転車だけは返してくれた。ソ連兵は  
私に向かい足をあげて前に行けと合図をしたので、部  
隊に帰り皆と武装解除を受け、兵器を大同広場に運ん  
だ。

私達の收容所は元撮影所の跡に移動した。

「別命あるまで待機しろ」との命令であった。

また收容所が移動した。次は日本軍の兵舎であった。  
他の部隊の兵隊が大勢集まっていた。そしてそこで混  
成部隊が編成され知らぬ者同士である。ソ連兵に囲ま  
れ五列に並び、これから北飛行場に整地作業に行くこ  
とになり夕方出発したが、これは嘘であった。大通り  
の両側には日本の民間人が大勢いた。

飛行場の作業に行く予定のところ、私達は貨車に乗  
せられた。

北安、孫呉を経て黒河に着いた。野宿して、満州の  
物資や食糧を舟に積んだ。若いソ連の警戒兵に（ブス  
トラダワイ）早く早くと言われながらの作業はきつ

かった。

九月十三日だったと思う。黒龍江を舟で渡り、ブラゴエンチェンスタの町に着いた。

また貨車に乗せられ二、三日して下車した。その時警戒兵は交替したようであった。

今度は行軍である。ブストラダワイ「早く」と何回も言われた。いやな言葉である。銃におどされ、行き先も知らされず、夜の山道をただ黙々と歩かされた。

途中二回程食事をした。二、三日後に着いた所は山奥で山の斜面にある第二五捕虜収容所であった。四方丸太と鉄線で三重に包囲され、四隅には高い望楼が作られ、その上には銃を持って警備兵が監視して居た。宿舎は半地下の建物で内部は二段になっていて、板の間で真ん中が通路で電灯は無く、ストーブはドラム缶であった。

到着した日の午後から早速作業に出され、横坑鉱山のトロッコ押しをさせられた。その作業現場で聞いた話だと、ここはチタ州シフタマダという所であった。作業はモリブデン鉱の採掘が中心だから、すべて鉱山

に繋がる作業で伐採、工場建設、発電所工事とそれぞれの「ノルマ」は決まっていた。それはそれは重労働であった。食う物は馬糧の高梁、皮付きの麦、大豆と黒パンにジャガイモと羊の骨ばかりのスープであった。作業は時々交替になった。大工経験者である私の仕事は、今度は建築作業に回された。大工といっても鋸（ピラ）平斧（タポール）位の道具で丸太を削ってボルトで締めるだけである。鉄棒を火で焼いて打ち込むために火を焚く事が許されたのが楽しみであった。

ソ連の大工が非常に良くしてくれた。綾部東京（ダモイ）妻（マダム）子供（マリーンケ）がいるのだからと言って、高い危険な所にはやらないようにしてくれた。

帰国一年位前から食堂が出来、ノルマでテーブルが決まっていた。

或る晩脱走者があったという事で部隊全員外に出され、五列に並べられ（アジン）（ドバー）と何回も繰り返し数えたが計算が合わず二時間程立たされたのは忘れられない。翌朝門前に、隣部落で捕らえられたそ

うで立たされていたが、開拓団出身の兵長で気の毒だった。

或る時熱が出て診察をうけさせて貰ったが体温三八度だったので女医は（ニイハチチヨロマン）ずるい兵隊だ。仕事をしたくないからだ（ニチエボー）差しつかえない、致し方なく作業に出れば（ブイストロラポータ）こんな状況は皆度々であった。

ソ連将校宿舎の使役に出た時など、マダムよりのパンやミルクなどのもてなしは良い思い出の一つです。

私の住んでいた北陵で民間人として最後の引揚時、小西街、満人部落に避難していた女、子供十五人位を迎えに行ってくれた、上等兵二名の方、本当に有難うございました。私の妻子もそこにいたのです。お陰様で妻と子供二人、無事コロ島より博多に上陸することが出来ました。

最後に、異国の地で亡くなられた戦友の皆々様の御冥福を心よりお祈り致します。

## 悪夢

高知県 東山 林

### 終戦までの経過

昭和十三年一月十日普通寺の山砲第十一連隊へ現役兵として入隊、昭和十三年十月十一師団と共に渡満、第四中隊、第六中隊第二大隊本部に所属し東満国境付近の警備に当たり、昭和二十年三月三十一日付けで独立混成第七十九旅団砲兵隊へ転属、人事係として牡丹江く石頭く安東と転進、昭和二十年八月十五日停戦となる。

### 終戦から入ソまでの間

#### 武装解除

武器と名の付くものはすべて（手旗からラッパに至るまで）一か所に集めてソ連軍に提出し丸腰となる。但し将校は帯刀を許される。

#### 妻との別れ